

おいしいパートナーの
見つけ方

Manami & Sbonsuke

春名佳純

Kasumi Haruna



エタニティ文庫

目次

おいしいパートナーのを見つけ方

5

おいしい結婚の仕方

279

書き下ろし番外編

おいしい新生活の始め方

311

おいしいパートナーの見つけ方

定時を少し回った頃、私——倉本真奈美は勤めている広告代理店のオフィスを後にする。十二月も半ばに入り、外はもうすっかり冬の気配になっていた。私は少し歩く速度を速める。

打ち合わせが長引いてしまったけど、料理教室の時間に間に合いそうだ。

「こんばんは、遅くなりました！」

教室に入ると、ドア付近にいた背の高い男性——平岡先生が微笑みながら私を迎え入れてくれた。三十代半ばの先生は常に落ち着いた大人の男の人だ。自分がこの人と付き合っているのだなんて、未だに信じられない。

「こんばんは、いらつしゃい」

彼の優しい目が私に向けられる。その瞳に熱が込める瞬間を思い出し、身体が火照るのを感じた。もうアラサーだというのに、私は先生の動作に一々反応して、挙動不審になってしまう。

「今日もよろしくお願ひします」

私は焦ってあいさつを返して調理台に行き、エプロンを身に着けた。その頃にはもう平岡先生は調理台の前に立っていて、説明と実演がすぐに始まった。

「今日は、ハンバーグを作ります。タマネギは皮をむいたら、みじん切りにします。みじん切りはタマネギを半分にして、このように切り込みを入れ……」

野菜の皮をむいていく繊細な指先。包丁を握る大きな手。ミンチをこねるたびにしなる手首。

それらが私の身体に触れる感触を思い出して、ぼうっとなった。私の胸元に添えられる大きな手のぬくもりを思い返す。手先が器用な彼は、いつも気がつかない間に私のブラを外してしまう。

その手に見とれていたなら、説明を聞き逃しそうになり慌ててメモをとった。

「それでは、みなさんも調理に取りかかってください」

平岡先生が二度ほど手をたたいた。これが合図となり、生徒たちは手を洗って調理に取りかかる。私も不慣れな手つきで包丁を持った。

しかし、タマネギがなかなか上手く切れない。

悪戦苦闘していると、平岡先生が来てくれた。

「倉本さん、包丁はもっと上の方を持つといいですよ。こんな感じで……」

包丁を持つ私の手に、平岡先生の手がそっと重ねられる。私より少し体温の高い彼の手は、私の手を正しい位置に導く。そのぬくもりを意識してしまい、つい気がそれそうになった。

「こ、こうですか？」

「そう、その感じです。あともう少し、頑張りましょうね」

穏やかな声が耳元で響く。それがベッドの中で私の名前を囁く時の声と重なり、思わず彼の薄い唇を見つめてしまった。自分が自分じゃないみたいで、ふわふわした心地に陥っていく。

「あっ、はい」

まずい。今はレッスン中なのに。

我に返った私はすぐに返事をし、包丁を持ち直す。そのまま慎重に動かしてみるものの、やっぱり上手に切れなかった。

それは、先生のことばかり考えてぼうつとしていたからじゃない。私は究極の料理音痴。いくら指導の上手な先生に教えてもらったって、なかなか上達しない。

ただでさえ下手なのに、肝心なレッスンに集中できないなんて……

そう落ち込んでいたら、ふいに柔和な笑みを向けられた。

「倉本さん、どうしました？ 手が止まっていますよ」

「あっ、すみません！」

まだ先は長いかもしれないけど、それでも、料理を頑張るって決めたんだから。

そう決意したのは、今から三ヶ月ほど前のことだった。

* * *

まだ残暑の厳しい九月中旬。

暑い日は、オフィスにどこか間延びした空気が漂う。だけど今日は、納期の締切日。さすがに誰ものおんびりしてはいなかった。

「倉本、例の記事は上がってきたのか？」

「はい。たった今、着きました！ これからチェックします」

「まったく、ギリギリだな……。いけそうか？」

「はい、間に合えますす！」

岩本課長とそんな会話を交わしたのが、三十分前のこと。

そして――

「納品完了しました！」

ホッと一安心して、一気に脱力してしまう。もう身も心もボロボロだ。余力はなく、

そのまま机につつ伏した。きっと髪もボサボサのはず。

「そういえば、前に美容院へ行ったのはいつだったけ……」

真つ黒で重苦しい髪がすっかり伸びきってしまった。今週末にでも切りに行こう。

私、倉本真奈美が勤めているのは「オフィスミユウ」という会社。求人情報に特化した広告代理店だ。情報サービスを提供する大手企業「トップマーケティング」のパートナー社——と言えば聞こえはいいが、ようするに下請けだ。従業員は十名程度と規模も小さい。

主な業務内容は、週刊の求人フリーペーパーの原稿作成。新卒で入社してから早六年、気づけばもう二十八歳になってしまった。

就職当初は、こんなにも自分が仕事人間になるなんて思ってもいなかった。

元々、広告業界に就職したかったというわけでもない。できることなら大手企業の総務、それが難しければ、どこでもいいから事務職に就きたいと考えていた。だけど、そんな漠然とした私の進路希望は、就職難の寒波に木々端微塵に砕かれてしまったのだ。

大学四年生の夏の終わり。内定が取れず、就職浪人の四文字が見えてきた私はさすがに焦った。すぎる思いで飛び込んだのはハローワーク。そこで見つけたのがオフィスミユウの求人情報だった。若干名のプランナー募集で、経験者優遇といったもの。経験はなかったけれども、だめもとで幾度かの面接に臨んだ。この会社にも落ちてしまったら

後がないという必死の思いが功を奏したのかもしれない。最終の社長面接で「本当は経験者が欲しかったのだけど。君の情熱を買って、合格ね」の言葉をもらったのだ。

「真奈美先輩、お疲れ様です！」

机に身体を預けたまま顔を横に向け、声がした方を見る。そこには明るい笑みを浮かべた女子が一人いた。

「美織は何でそんなに元気なの？ 私、もう顔を上げる力すらないんだけど」

「だって、ようやく仕事から解放されたんですよ。これは喜ぶつきやないでしょー？」

川崎美織は、私より二つ年下の二十六歳。栗色のボブヘアに、カジュアルなパンツ姿。いつも覇気があって、とにかく元気な印象だ。

「解放されたって言っても、ほんの束の間の安らぎよ？ すぐに再来週分の仕事が押し寄せてくるじゃない。それに、仕事から解放されたって……」

「一人で家飲み、ですか？」

そのワードは決して愉快なものではないのに、美織の笑顔は引き続き絶好調だ。

「そうそう。よくわかってる」

「真奈美先輩、お酒弱いのに、飲むの好きですよね……。そんなことより、私、次の週末から彼氏と一緒に暮らすことになったんですよ」

「えっ?」

それを聞いた途端、私はガバツと身を起こした。

「何それ! 聞いてないよ?」

「はい。だって今、初めて言いましたもん」

頬を乙女のように赤く染めて、この上なく幸せそうな顔で話す美織。

「いやいや、彼氏がいる話自体、初耳なだけど?」

美織とは残業後によく食事をして、仕事の愚痴やプライベートの味気なさについて語り合ってきた仲だ。

それがいつの間に?

「語学学校に通い始めたことは話しましたよね?」

「あ、うん。確か、フランス語だっけ?」

仕事に忙殺される毎日で、よくそんな時間が作れるなあと感心していたのだけど。

「実はその先生と付き合い始めて……」

「うっそー!」

そんな少女漫画みたいな話、現実にあるんだろうか。私はますます目を丸くさせるばかり。

「え、先生ということは、もしかして……」

「はい。彼氏、フランス人なんです」

「……………」

「……先輩?」

驚きすぎて、一瞬声が出なかった。

「なにそれ、スゴイ!」

遅ればせながら叫んだ声は、自分でもやけに白々しく感じる。

「もう一緒に暮らす準備万端なんですよ。料理の練習もしてるんです」

「りよ、料理? もしかして、これから毎日作るの……?」

「はい。彼のために作ってあげるんです」

料理――

そのワードに、私の古傷がわずかに疼いた。

今までの彼氏に散々私の手料理を「まずい」とけなされてきたことを思い出し、しまったのだ。

顔を引きつらせる私に、幸せの絶頂にいる彼女は少しも気づかない。

取りつくるように、私は会話を続けた。

「そ、そんな時間がどこに?」

「あ、もちろん仕事の手は抜きませんから、今まで通りに頑張る所存です! プライ

ベートの時間をうまく使って料理しようと思ってます」

「さ、さいですか……」

仕事に追われている私たちに、そんな余裕はないはずなのに。食事を毎日作ってあげるなんて。

自慢ではないけど、私が台所に立ったのはもう半年以上も前……

そう、あれは確かお正月だ。あずきの缶詰とお餅でぜんざいを作った。作ったというか、温めただけといった方が正しいかもしれないけど。

「彼氏かー、フランス人かー、料理、か……」

美織が自分の机に戻ってから、思わず一人で呟いた。そのどれもが、自分には縁遠い言葉のような気がする。

思い起こせば、大学を出て就職して以来、彼氏どころか男友達とも疎遠になっていた。寝ても覚めても仕事のことしか頭になかったんだもの。

「こんなに仕事がついついとは思わなかったもんねー」

社会人をなめていたとしか言いようがない。

誰も定時には帰らず、残業は当たり前。土日も出勤している人が多数。納期前に至っては、みんな目の下にクマをつくり、睡魔と戦いながらの深夜残業。

入社当時は戸惑ったものの、それもほんの一、二ヶ月のこと。三ヶ月目に突入した辺

りからすっかり慣れ、私も締切と戦う立派なクマ持ち社員になってしまったのだった。

それから、脇目も振らず仕事に邁進してきた。どんどんやりがいを感じて、仕事漬けの毎日を楽しんでいるようにもなった。

だから、今は恋愛する余裕がない。ずっと自分にそう言い聞かせて、無理やり諦めてきた気がする。素敵な男性と出逢って週末を一緒に過ごし、同棲とまではいかなくてもデートしたり旅行したり……。そんな甘い夢からは目を背けた。

自分をごまかして、仕事しか見ないで来たんだ。

「ああ、普段はこんなこと考えないのになあ」

「こんなことって？」

「えっ？ わっ！」

ずいぶんとぼんやりしていたらしい。気づくと、岩本課長が私の顔を覗き込んでいた。

岩本課長は四十代後半の活字中毒者だ。小説からエッセイ、週刊誌に漫画まで彼の読書量は半端ない。外見は爽やかな気の良いおじちゃんだけだね。

「倉本、どうだ？ 今日、飲みに行かないか？」

「えっ、珍しいですね。課長が誘ってくれるなんて。さては接待ですか？」

「そんな大げさなものじゃないんだが、アイラデザインに誘われてな。せっかくだから女の子を連れてこいってうるさくて。ほら、お前の気に入ってる細見さんも来るらし

いぞ」

私は普段、美織以外の人とは、ほとんど飲みに行かない。たまに行くのは、こういう取引先絡みの飲み会だけだ。

アイラデザインは、うちとタッグを組んで求人フリーペーパーの記事をデザインしている会社。最も顔を合わせる機会の多い取引先だ。

ちなみに、細見さんは新しくうちの担当になったデザイナー。三十代前半くらいのイケメンである。

「気に入ってるなんて、ただかっこいいって言っただけですよ。でも、行こうかな」
「おう、そうこないとな」

疲れた身体に鞭を打つことになるけど、一人で家飲みするのはやっぱり寂しい。

私は定時を一時間ほど過ぎた後、課長のお供で飲みに行った。

飲み会の会場は、オフィスの最寄り駅から電車で二十分ほどで着くターミナル駅のすぐそばだった。チェーン店ながらも少しだけ高級な居酒屋だ。個室に通された参加者は全部で九名。

思った通り美織は欠席した。今日は以前からフランス人の彼氏とデートの約束があったらしい。こういう飲み会の席にはいつも二人そろって参加していたのに、とつい置いて

けぼりを食らったような気分になってしまふ。

「それじゃあ、お疲れ様です。乾杯！」

アイラデザインの若手社員が声高々に音頭おんどを取る。みんながジョッキを掲げて、それをコツンとぶつけ合った。

岩本課長の差し金だと思うけど、私の席は細見さんの隣だ。

「今日、納品日だったんですってね。お疲れ様です」

優しく声をかけてくれる細見さんは、黒い無地のTシャツにベージュのワークパンツをすらりと着こなしている。

うちの会社では、女性にはわりとラフな格好が許されているものの、男性陣は一応スーツで出勤している。一方のアイラデザインは男女ともに私服。さすがにみんなセックスが良いというべきか、思い思いの服装で自分を表現していた。

私はパンツ姿が多く、今日も白のスキニーにモカのドレープシャツだ。

ちらりとアイラデザインのお嬢さん方を見てみれば、デニムのショートパンツにラフなブルオーバーを合わせていたり、チェック柄のロングワンピースを着ていたり。華やかなのに品もあるところはぜひ見習いたい。

そんなことを考えていると、細見さんに再び話しかけられた。

「俺、前の担当者から聞いてたんですよ。倉本さんは相当デキる人だって」

「えっ！ 一体、何を聞かされてたんですか？」
私の顔から血の気が引く。

「ははっ、どうしてそんなに不安そうなんですか」
「だって……」

仕事はもちろんきつちりこなしているつもりだけど、それが周囲の人間にどう見られているかはまた別の話。仕事に熱心すぎるあまり、女を捨てている・ガサツ・オヤジ化などなど、女としての魅力がないと噂されているんじゃないかと気になっていたのだ。

「倉本さんは美人で仕事の段取りもいし、作る記事のクオリティも高いつて聞いてたんですよ。今回、一緒に仕事させてもらってよくわかりました。本当ですね。仕事は的確だし、お綺麗だし」

「いえ、そんな」

あからさまなお世辞だとは思ったけど、つい顔が火照るのを感じた。

今まで一緒に仕事していたのは総じて年上の素敵なおじさまたち。彼らに美人だとチヤホヤされることはたまにあっただけど、それに対しては笑顔でお礼を言う余裕があった。なのに同年代の男性からの褒め言葉となると、どうしてこんなにも動悸が激しくなってしまうんだろう……あつ、細見さんがイケメンだからか。

「ビール、つぎますね」

自然な動作で細見さんが私のグラスにビールをついでくれる。見れば、細見さんのグラスも空いていた。

「あつ、すみません！ 私ってば、気づかずに」

「いいんですよ。倉本さんはゆっくりしてください。お疲れでしょうから」
さらには気遣いまでできるとききた。

自分と比べて、別の意味でも恥ずかしくなってしまう。顔を伏せると、ビールをついでくれる骨ばった大きな手に目が釘付けになった。

今まで同年代の男性と接点がなかったけど、これから私にも何か素敵な出来事が起こるかも——そんな甘い予感を覚えた、その時。

「そういえば、細見さん！ 聞きましたよー」

すでにずいぶんとお酒が回っているらしい岩本課長が、いつもより陽気な雰囲気で見さんに声をかけた。

「おめでとうございます！ もうすぐ結婚するんだってね」

「……っ、ゲホッゲホー！」

思いがけないその言葉に、ビールを飲んでいた私は盛大にむせてしまった。
何それ、どういうこと？

「大丈夫？ 倉本さん」

「す、すみません。平気です」
細見さん本人に心配されてしまい、顔から火が出そうになる。幸い、細見さんはすぐ課長の方を見た。

「ありがとうございます。ちょっと照れくさいんですけど」
私の隣で細見さんが微かに顔を赤くして言う。

「……なんだ、フィアンセがいるんだ。」

「そうなんですよー。ついに細見も！」

「奥さん、すげー美人なんだよな。よつ、美男美女！」

岩本課長の声が大きかったから、他のみんなもそれぞれ声をかけたり茶々を入れたりし始める。私は一瞬で夢を碎かれて呆然としてしまい、ろくな反応ができなかった。

「ずばり、結婚の決め手は!？」

そんな中、同僚の男性の声に細見さんがすぐに答える。

「やっぱり、料理かな」

「……っ！」

ここでも料理だ。私はふらりとよろめきそうになった。

「あー、そうだよな。家に帰って、美味いメシがあるのが一番だよな！」

「胃袋を制する者は男を制す！」

「そ、そうなんですか？」

堂々とのたまった岩本課長の顔をじっと見つめながら、私は思わず尋ねる。

「そりやそうだろう。倉本も料理はできた方が良くぞ」

「倉本さんみたいに美人だったら別にできなくても問題ないですよ」

いやいや、そう言うあなたは料理のできる女性を選んだんでしょ、しかも美人なんですよー！

細見さんを見つつ、私はやさぐれて曖昧に微笑んだ。

「はは……、私も料理頑張ります」

* * *

その日、帰宅した私は無気力のまま、ベッドに身体を放り投げた。

深夜でもまだ空気は生ぬるくて重ったるい。エアコンのリモコンに手を伸ばし、流れてくる汗をどうにか食い止めようと試みる。

『もう一緒に暮らす準備万端なんですよ。料理の練習もしてるんです』

『やっぱり、料理かな』

『胃袋を制する者は男を制す！』

疲労困憊ひろうこんぱいしている中、みんなの声が次々に再生されていく。

私だって、かつては真面目に料理に向き合っていた。

あれは大学に入ってからすぐの頃。当時、初めてできた彼氏に食べて欲しくて、せっせとお弁当を作っては差し入れた。テニスサークルの先輩だった彼は、練習の合間に卵焼きを口に入れて「これはちよつと……、料理頑張つて」と苦い表情を浮かべたり、おにぎりを手に取って「お、おお、これ普通のおにぎりだよな？」と顔を引きつらせたりした。

その彼とは別れた後。大学三年の時にできた二人目の彼氏にも、今度こそと気合を入れて手料理を振る舞った。同じ学部の同い年だった彼には「塩辛いカレーは初めて食べたよ」と困った顔を向けられたり、「いや、このハンバーグはちよつとレアすぎないかな。うん、わかった。次からは俺が作るから、真奈美はもう無理しなくていいよ。今までもありがとな」と労をねぎらわれたりした。

それでもめげずに一人で猛練習したものの、私の料理の腕は一向に上達しなかった。元彼たちが料理上手な女の子と付き合い始めるのを見て、私のやる気はみるみるうちに失われていったのだ。

そして、社会人になり仕事で忙しくなったことを口実に、私は料理から遠ざかってしまった。自分ほとんどもなく料理音痴おんちなんだ、私には料理も恋愛も無理なんだと諦めて。しかし、今日改めて思い知らされた事実。恋愛には料理という武器がある方が有利な

ことは間違いないさそうだ。

仕事は好きだし、この先もずっと続けていきたい。だけど時々、ふっと寂しくなってしまうことがある。もうこれ以上、仕事を口実にはしたくない。

「私だって恋がしたい……」

枕に頬をくつつけて、ぼーっと白い壁を見つめた。

このままふて寝するか、それとも、やけ酒か。

「決めた！」

私はそのまま目を閉じるのではなく、冷蔵庫に直行した。とはいっても、缶ビールが目当てじゃない。

「何にもないかあ。冷蔵庫、空っぽ」

そう、せっかくだからもう一度料理を頑張ってみようと思ったのだ。きつと、今こそ重い腰を上げる絶好のチャンスのはず。

「これは、まず買い物へ行くところからかな？」

徒歩三分のコンビニに買い物に行ってきた私の手には、白いビニール袋。中には卵の六個入りパックと白米二キロ、それにファッション誌とコンビニデザートが入っている。「よし、やるか」

ここ何年も使ってなかった炊飯器を洗い、お米を洗って水に浸してみた。

「あー、あったあった」

次に、台所の引き出しの奥から卵焼き器を引っ張り出した。しかし、見るなりげんわりしてしまう。

「ほ、ほこりが溜まつてる……」

仕方なく卵焼き器を念入りに洗いながら、塩や砂糖はあつたはずと頭の中で所在を確かめる。

けれど、何気なく時計を見て、ピタッと手が止まった。気づけば、もう午前一時を回っている。

元々飲み会の開始時刻が遅かった上、二次会にも参加したので、帰宅したのはとつくに午前零時を過ぎていた。

「もう今日は疲れたし、いっか」

よく考えれば、明日は土曜日だ。納期の翌日でさすがに休むつもりでいたし、料理に励むのは明日にしよう。

そう思った瞬間、さつきまでやる気になっていたのに、一気にすべてが面倒に思えてきた。

炊飯器の予約ボタンだけ押すと、私はそのままベッドにダイブし、五分後には早々に眠りについた。そう、シャワーを浴びることもメイクを落とすこともせずに。

翌朝、というより、もう正午近く。

——ピンポン。

控えめにチャイムが鳴ったと思ったら……ピンポンピンポンピンポン！ と連打された。

「もう、うるさい……」

ようやく観念し、のそのそと起き上がる。椅子の背もたれにかけてあつたサマーカーデイガンを羽織ると、玄関に顔を出す。

「……はい」

「あ、寝てた？」

「……やっぱり、あんた？」

ニヒヒと品のない笑みを浮かべるのは弟の晴人はるとだった。

私より四歳下の二十四歳で、美容師見習いをしている。職業柄か、会う度に髪の色や髪型をころころ変えているので落ち着かない。今日はアッシュグレーで無造作にまとめであった。

「どうしたの？」

こんな風に、晴人が突然訪ねてくるのはいつものことだ。だから、だいたい答えの予想はついていたんだけど、一応聞いてみる。

「いや、友達と約束してたのに、ドタキャンされてさ。待ち合わせ場所がこの近くだったから来てみた」

「来るのはいいけど、前もって連絡くれればいいのに」

「だって、行く方が早かったから。上がっていい？」

「私が彼氏と一緒にだったら、とか考えないの？」

「いや、だって今、一人でしょ？」

「ま、まあ……」

聞くんじゃなかった。

「じゃあ、問題ないじゃん」

サラリと笑いながら言われ、腹が立つやら悲しいやら。

「いや、今日は良くても、この先も平気だとは言えないし——」

「大丈夫だよ、姉ちゃん。今の生活を続けてるかぎり、男なんてできないよ」

はつきりと断言されてしまった。悲しいが、これに関しては晴人に軍配くんぱいが上がってしまふ。もう腹を立てる気力さえなく、ただ打ちひしがれた。

「な、なんてひどいことを……」

「だって、昼まで寝てるし、寝癖つけてパジャマのまま出てくるし……うわっ、おまけに部屋の中もぐちゃぐちゃ」

晴人がグツと身を乗り出して、私の1K、家賃六万四千円の部屋を見渡す。

五階建ての三階南向き、オフィスまで徒歩五分という近さがお気に入りだ。就職して以来、ずっとここに住んでいる。

「この調子だと、会社の机回りだってひどいんじゃない？」

「うっ……」

思い当たる節ふしがいっぱいあって、自分の胸を押さえてしまった。

昨日プリントアウトした書類は机の上に置きっぱなしだし、いい加減、棚の整理をしないかと思っただけは経っている。引き出しにいたっては一番上以外、何が入っているのか皆目見当もつかない。

「姉ちゃん、ヤバイんじゃないの？」

「ひいっ！」

まるで怪談話でもするように声を潜ひそめる晴人に、私はつい身震いしてしまふ。

「そもそも姉ちゃん、社会人になってから彼氏いたことあったっけ？」

「……ありません」

「それって、女子力ゼロ？」

「お、弟よ。もう、私には返す言葉が何も……あつ！」
「な、何？」

突然声を上げた私に、晴人はびくっと肩を揺らして驚いた。

「そうよ。私も反省して、料理頑張ろうと思ってたのよ！」

「へえ、料理？」

「そうそう。卵焼きを焼くつもりだったんだから、まあ上がってよ。ほら、そこに座って。着替えるからちよつとあっち向いてて」

「へえ、作ってくれんの？ 姉ちゃんの手料理が食べられる日が来るとはねえ」

「楽しみにしててよね」

晴人を部屋に招き入れ、さつと着替えてから意気揚々と炊飯器の蓋を開けた。

「もうね、ご飯は昨日のうちに予約して……って、あれ？」

今朝、炊き上がるように予約しておいたはずなのに。

「ん？ どうかした？」

「な、何で、こんなことに……？」

保温状態の炊飯器を覗き込んで声を震わせる私に、晴人が寄ってくる。

「どれどれ……ああ、水加減間違えたでしょ？」

べっちょべちよのご飯を見て、晴人が呆れたような目を向けてきた。

「うそ、私……ご飯も炊くことができないの？ 炊飯器を使ってるのに」

嘆く私の肩を晴人が面倒そうにたたく。

「あー、はいはい。そんなのはすぐできるようになるよ。それより、卵焼き。焼いてくれるんでしょ？」

「あつ、そうだった！ ちよつと待ってて」

笑顔と勢いを取り戻す私に、床に散らばっている雑誌を拾いつつ晴人が言う。

「うん、部屋片付けながら待ってるね」

「面目ない……」

私はしょんぼりと肩を落とした。そして二十分が経ち――

「姉ちゃん、卵焼きまだー？ こんなに時間かかるっけ」

晴人が不安そうな顔をして台所まで様子を見に来た。

「ちよつと待って！ 上手く巻けなくて……あつ、破れた！」

「そんなに長いこと焼いてると……って、姉ちゃん！ 火強すぎない？」

「えっ、そう？ うわっ、黒い！」

卵をひっくり返して思わず声を上げる。表面が真っ黒になってしまっていた。

「あー、もうダメ！ やっぱ私、料理できない……」

意気消沈した私は卵焼き器も菜箸も投げ出して、台所にうずくまるしかなかった。

「いや、慣れてないだけだと思う。やらなかったら、そりやできないだろうし」
 事実をスバズバ指摘していた晴人は私を哀れに思ったのか、フォローに回っている。
 優しく背中をさすってくれる弟を、さすがのように見上げた。

「そうかな？ でも、今までろくに料理できたことがないんだよ？」

「だから、経験が足りてないんだよ、きつと。人より頑張らないといけないかもしれないけど、いつまでもできないなんて決まってるわけじゃないじゃん」

「練習すれば私にもできるようになるかなあ」

「多少はなるんじゃない？」

今まで仕事一色、それはそれでやりがいのある充実した日々を送ってきた。しかし、それだけでは物足りない。私だつて恋愛したい、彼氏が欲しい。ゆくゆくは結婚もしたい。

夢見ているだけでは何も変わらないんだ。それどころか、状況は刻々と悪化していく。私はもう立派にアラサーと呼ばれる年齢なのだし、女子力を上げなくてはいけない。

「よし、決めた。料理、本格的に頑張ってみる！」

今まで残業続きだった毎日。食事はコンビニ弁当で済ませることがほとんどだったけど。

「週一回は早く帰って自炊する」

「おー、パチパチ。頑張れー」

晴人の間延びした声に背中を押され、私はそう決意したのだった。

* * *

翌週の月曜。

急ぎの仕事もなかったので、マッハで仕事にキリをつけ、私は席を立った。

「お疲れ様です。お先に失礼します！」

「え、倉本？ もう帰るのか？」

目を丸くする岩本課長に軽く会釈して、颯爽と廊下へ。定時というわけにはいかなかったけど、まだ午後七時半だ。

普段、オフィスを出るのは早くても十時過ぎ。

岩本課長に驚かれるのも無理はなかった。

ビールを出ると、夜とはいえやっぱりまだ額に汗がにじむ。じつとりとした空気に負けじと、そのまま力強い足取りでスーパーへと歩いて行く。

お米と卵は買ってある。今日はサラダとお味噌汁も作ってみるつもりだ。

やっぱり食費を考えると、コンビニよりもスーパーマーケットの方がいい。

スーパーはオフィスから徒歩五分、自宅からでも徒歩十分ほどの場所にある。駅前では便利なのに、今まで見向きもしなかった自分に少し呆れてしまう。

まずは、こういうところから変えていこう。

スーパーの前まで来た時、ふと良い匂いに吸い寄せられそうになった。煮物か何かを想像させる、とても食欲をそそる匂い。

そういえばお腹が空いた。

ゆつくりと匂いをたどってみると、どうやらスーパーの上から漂ってきているらしい。このスーパーは四階建てのテナントビルの一階部分に入っていて、上層階にもクリニックやエステサロンなど、何らかのテナントが入っている。

見上げると、三階部分の窓ガラスに、『平岡料理教室』の文字が躍おどっていた。

「料理教室！」

そっか、その手があったか！

思わず一人呟いてしまった。

視線を下げると、スーパーの入口付近に、料理教室の看板と共にパンフレットが置いてある。私はそれを手にすると、ひとまず予定通りスーパーで買い物をしたのだった。

平岡料理教室。応用コースと基礎コースがあり、私が気になっている基礎コースは初

心者から面倒をみてくれるとのこと。一クラス四人と少人数制で、週一回、一人で決められたメニューを作る。毎週、卵料理や牛肉料理などのテーマが設けられているらしい。全国的に有名な料理教室より良心的な月謝で、何より、自宅から近いのが一番のポイントだ。

「よし、決めた！」

思い立ったら即行動と、少し緊張しながらもスマートフォンを手取る。今は午後九時半過ぎ、ちょうど基礎コースのレッスンが終わった頃のはず。番号を押すと二コール後、受話器越しに柔らかな女性の声が聞こえてきた。

「はい、平岡料理教室です」

「あの、夜分遅くに失礼いたします。基礎コースへの申し込みをお願いしたくてお電話したのですが」

「ありがとうございます。基礎コースはカリキュラムの都合上、次は十一月のスタートとなりますが、よろしいでしょうか？」

「十一月……あ、はい」

「では、お名前とご連絡先をお願いします」

十一月とは出鼻をくじかれた気もするけど、優しそうな女性の先生で良かった。これを機に、しっかりと基礎から習おう。

「今度こそ、料理ができるようになる！」
電話を切ると、前向きな気持ちでそう誓った。

* * *

十一月――

結局、この一ヶ月半の間も相変わらず仕事に明け暮れていた。せめてもの進歩と言えば、部屋やおフィスの机回りの整理整頓を心がけるようになったことくらい。

しかし、それも今日までだ。

「お先に失礼します！」

かつてないほどの気合で仕事を片付けて、私は午後六時半に席を立った。岩本課長はちょうど席を外していたけど、美織が私の名前を呼ぶ。

「真奈美先輩！ 早いですね、もしかしてデートですか？」

「そうだったらいんだけどねー。残念ながら違うんだ。美織は彼とどう？」

「ふふ、順調です」

美織は幸せそうにニコニコと笑う。フランス人の彼氏とは上手くやっているみたいだ。私は「お疲れ様。また明日ね」と言っておフィスを後にした。

「今日から私も頑張らないとなあ。よし！」

一人きりのエレベーターで宣言すると、いつもより弾んだ足取りで外に出る。すでに日が沈み、木枯らしが疲れた身体に沁み入るけど、今日は気にならない。

わずかに緊張しつつも高揚した不思議な気分、私は目的地へ向かった。

スーパールの隣、奥まったところにひっそりと佇むエレベーターで三階まで上がる。スーパードア以外の共用部分は小汚いし、エレベーターもガタガタと音を立てて作動するしで、少し不安になってきた。この駅前ビルは、相当年季が入っているようだ。

三階のフロアに着くと、クリームがかった白い壁に案内板がある。「平岡料理教室」の字の横にある矢印は、左の方向を向いていた。

左へと足先を向け、ほんの数歩歩くとすぐ壁につきあたった。それに沿って右に曲がる。そのまま奥まで進んでいくと、茶色いドアの曇りガラスに「平岡料理教室」の文字があった。

廊下からは中の様子がうかがえず、そわそわしてしまふ。

初めての場所に行く時って、どうしても勇気がいるのだろう。

一度深呼吸をしてから、おそるおそるドアをノックする。その音は微かに響いただけだった。そっとドアノブに手をかけ、重い扉をゆっくりと開く。

学校の調理実習室を彷彿^{ほうふつ}とさせるその空間には、誰の姿も見当たらなかった。古さを一切感じさせない真っ白で清潔な空間には、向かい合わせになった調理台が三組、奥から縦に並んでいる。

気合を入れて早く来すぎてしまったのかもしれない。不安がさらに大きく膨らんでいくのを感じていると、右手方向から何やら音が聞こえてきた。

これは……そう、包丁でまな板をトントンとたたく音だ。

事務所でもあるのか、部屋の右側はクリーム色のパーテーションで目隠しされている。その仕切り板がせり出していて、音のする方は見えない。きっと、先生がレッスンの支度でもしているのだろう。その音は少しもよどみなく、一定のリズムを心地良く刻んでいる。

私はドアを開けたまま、あいさつしようと仕切りの奥を覗いた。

「あの……っ」

声をかけようとして、はっと口をつぐむ。私が想像していたのはたおやかな女性の姿だったのに、実際に目に飛び込んできたのは青いエプロンを着けた長身の男性だったから。

並ぶ三組の調理台を見渡せるように、右端に指導用の調理台が一つ置かれている。男性はそこで慌ただしく、しかし、しなやかに手先を動かしていた。大きな手で握られた

包丁がキャベツを千切りに刻む。そのリズムは途切れることなく、淡い緑の山が作り上げられていく。

今まで男性が料理しているところなんてほとんど目にすることがなかったし、こんなに上手な千切りも見ることがない。

感動を覚えて目を離せずにいると、ふいに男性が手を止めて顔を上げた。

「あ、いらつしやい。今日からの生徒さんですね」

男性は少し目を見開いた後、柔和な表情を浮かべた。その微笑があまりに優しくて、私は息を呑んで控えめな声で頷いた。

「あつ、はい。こんばんは」

色素が薄い髪色は茶に近い。背は百八十を優に超えていそうだし、体型もどちらかといえばガツシリしている。それなのに、彼の持つ雰囲気は穏やかで柔らかく、そのバランスが妙にしっくりときていた。

思わず見とれてぼんやりしていた私に、思いがけない言葉が降ってきた。

「初めまして。講師の平岡です」

「えっ、男の先生？」

「あー、もしかして女性の方が良かったですか？」

平岡と名乗った男性は苦笑いを浮かべ、包丁をまな板の上に置く。そんな些細^{ささい}な仕草

もなめらかで上品だ。対照的に、私は焦りつつ口を開く。

「いえ、勝手に女性だと思い込んでいて。お電話は女性だったのです」

「ああ、なるほど。電話をお受けしたのはアシスタントです。今、お使いを頼んでいますが、もうじきここに戻ってきますよ」

「あ、そうだったんですね」

ようやく微笑み返せる心の余裕ができた私は、それでもやっぱり平岡先生から目を逸らすことができなかった。

彼は「新人生」の私を歓迎するようになおも笑いかけてくれ、数秒間見つめ合う。

直後、「こんばんは」「今日からお世話になります」と次々に声が聞こえて、私たちは互いから視線を外した。

「それでは、みなさんそろいましたので始めましょうか」

私は一番奥、窓際の調理台を使うことになった。私の向かいの台を使うのは唯一の男性、あとは年上の主婦らしい女性と女子大生っぽい女の子とが対面して並ぶ。今回の基礎コースの生徒はこの四人のようだ。

「この中には初心者の方も、もう一度基礎を見直したいという方もいらつしやるかと思えます。今日からの基礎コースは、回を重ねるにつれて基本的な料理のコツが押さえら

れるようになっていきます。まずは苦手意識や不安をなくして、毎回楽しく料理していきましょう」

どうやら、平岡先生はいつも微笑みを絶やさないといいらしい。その微笑がこの上なく柔らかく、品もあって魅力的だ。雰囲気があるというか、平岡先生にしかできない笑顔とでも言えはいいのか。

「今日はまず基本中の基本、包丁の握り方と野菜の切り方です。最初にサラダを作ってみましょう」

まずは平岡先生がお手本を見せながら説明する。

「ダイコンは歯ごたえを大切にしたいので、繊維の向きに沿って少しずつ包丁をずらしながら切っていくようにしましょう。ジャガイモは……あ、すみません。ジャガイモを持つてきにくれますか？」

平岡先生がパーテーションの向こうに声をかけると、ジャガイモを手にした綺麗な女性が姿を現した。

「あ、みなさんに紹介しておきます。彼女はアシスタントの松林まつばやしさんです」

「松林美鈴みずねです。よろしくお願ひします」

控えめに松林さんがお辞儀する。身長は高くないものの、すらっとしていてモデルのようだ。焦げ茶色のロングヘアを緩く巻いた髪型が女性らしい。歳は私と同じか少し上

くらいだろうか。

先生は彼女からジャガイモを受け取ると、再び実演を始めた。

「それでは、やってみましょうか」

一通り説明を終えると、平岡先生は合図するように軽く手をたたいた。

手を洗って説明された通りに用意を済ませ、まずはダイコンを手取る。すでにサラダ一人分の量に切り分けられ、五センチ程度の長さになっていた。

皮をむくのにピーラーを使わないなんて初めてだ。

震える手で、おそろおそろ包丁の刃をダイコンに差し込む。じつとりと手に汗がにじんだ。ゆっくりと力を入れ、皮をむき始めた次の瞬間、あらぬ方向に皮の断片が飛んでいく。

「きゃっ!」

「わっ」

私と向かいの男性が声を上げたのは、ほぼ同時だった。私の飛ばした皮が男性の顔に直撃したのだ。

「ご、ごめんなさい。すみません!」

私は男性にひたすら謝る。

「いや、いいけど……ははっ、びっくりした。どうやってらこんな飛ぶの?」

彼は頬にくっついた皮を指先で取り、明るく笑った。

「料理、全然だめで……」

私は彼と目が合わせられない。

彼は仕事帰りなのだろう、カッターシャツとベストの上から黒一色のエプロンを身に着けている。細身の体形で一見、真面目な好青年……なんだけど、明るい色の茶髪は長めだし、口調も軽い。彼は好奇心旺盛おうえいといった声で話しかけてきた。

「いいよ、そんな顔しないで。オレ、今井彰人。お名前は?」

「あ、倉本真奈美です」

「真奈美ちゃんね、よろしく。これから仲良くしようね!」

「は、はあ」

戸惑った私は、間拔けな声を出す。

久しぶりに異性に「真奈美ちゃん」なんて呼ばれた。

「今井さん、レッスン中にナンパするのはやめてくださいね?」

いつの間にそばまで来ていたのか、平岡先生は笑いながら今井さんに注意する。

「あー、バレましたか。大目に見てくださいよ、平岡先生」

「いえ、ナンパは厳禁ですよ。それより、倉本さん」

二人の会話をぼんやり聞いていると、平岡先生の目が私に向けられた。私は少したじ

ろぐ。何しろ皮をむくことすらまともにできないんだから、どんな顔をすれば良いのかわからない。

「ダイコンの皮むき、もう一度やって見せてくれますか？」
「は、はい」

今井さんは大人しく自分の作業に戻っていったようだ。

私はおずおずと頷いて、再びダイコンに包丁の刃先を向ける。

「あ、ちょっと待った」

いざ包丁の刃をダイコンに潜り込ませようとしたら、平岡先生にすぐ止められた。

「親指の位置に気をつけてください。親指は常に、皮をはさんで包丁の刃の少し前です」

「そ、そんなところに置いたら、指を切ってしまいませんか？」

確かに先生はそう説明していた。だけど、指が怖がってどうしても逃げてしまう。

「大丈夫ですよ。親指でしっかりと方向を導いてあげるんです。むしろ、さつきみたいに全然違う位置に置いていると……」

そこで先生は一呼吸した。

「指切りますよ」

「ひいっ！」

爽やかな笑みと共に鋭く告げられた一言に、一瞬、背筋が凍るかと思った。

「だから、気をつけてくださいね」

品のある微笑から一変して、今度は茶目つ気のある笑顔を向けられてしまった。

この人は怒る時も笑顔なのかもしれない。涼しい笑みを浮かべ、静かな憤りを相手に伝える人だ。怒りをそのままあらわにするよりも、笑顔の方が何倍も迫力があって恐ろしいだろう。特に平岡先生のこの笑顔ならば。

余計なことを考え始める頭を目の前に集中させ、もう一度挑戦する。

「よし、指をここに置いて……」

「もう少し手を包丁に近づけてください」

その声が思いの外近くで響いたので、私は驚いて後ろを振り返った。先生のエプロンがすぐそばにあつて心臓が跳ねる。私の手の上に、平岡先生の手がのせられた。大きな手のひらは少し熱く、私の手を正しい位置にそつと導いてくれる。

「は、はい。こうですか？」

こうして手を取って指導してもらうだけで、情けないことに声が裏返ってしまいそうになる。やっぱり私は男性に対して免疫がないのだと自覚した。

「そうです、その感じでむいてみてください」

平岡先生に見つめられると緊張する。震えそうになる手を叱咤しながら、私は教えら

れた通りダイコンをむいていった。すると、さつきとは違い、ちゃんと皮がくつついたまま細長くむくことができた。

「あ、できた！」

残ってしまった箇所もあったが、大部分の皮はむけていると思う。

「良いですね。ジャガイモはもつと難しいから、頑張ってみてください」

「はい。ありがとうございます」

平岡先生の背を目で追っている途中、向かいの調理台が目に入った。先ほど迷惑をかけてしまった今井さんがジャガイモの皮をむいている。

「え、すごい……」

ジャガイモはほこぼこしているというのに、今井さんはすすーっと薄く皮をむいていた。その手つきには一切の無駄がなく軽やかだ。

「まるで職人芸……、あっ」

思わず見とれてしまっていると、目が合った。

「ははっ、ありがとう。慣れればできるようになるよ。何なら、オレが教えてあげようか？」

独り言をばっちり聞かれてしまい、顔が熱くなる。

「い、いえ！ 自分で頑張ってみます」

「そう？ ジャア、困ったらいつでも呼んで」

さらっとした口ぶりは、彼が女性慣れしていることを感じさせた。しかもその声には、料理に対する自信もしつかりと含まれている。

確かにエプロンをして調理台に向かう彼の姿は少しも浮いておらず、かなり様さまになっている。そんな人がどうしてこの基礎コースにいるんだろう。

「倉本さん、手が止まっていますよ」

「あっ、はい」

ポーツと考えていたら、いつの間にか平岡先生がそばに立っていた。慌てて私もジャガイモの皮むきに取りかかる。

だけど今井さんのようにはできなくて、厚く皮をむいたジャガイモはすっかり小さくなってしまう。

基礎コースの毎回の流れとしては、説明、実習、試食、後片付けだ。四人の中で最も慣れていない私は案の定、後片付けの食器洗いも一番遅かった。

一番に片付け終えた今井さんはすぐに帰ったものの、女性陣は私を待っていてくれた。三人で一緒にエレベーターに乗り、ビルを出る。

「すみません！ お待たせしてしまって」

「大丈夫よ、ゆっくり帰りましょう」

優しくそう言ってくれたのは、四十代で主婦の橋本美月さん。大らかで優しい雰囲気
が漂っていて、話しやすそう。

「毎回、こんな感じなのかな？ 楽しみですね！」

声を弾ませるのは最年少、二十歳の長谷川優希ちゃん。小柄でいかにも女の子らしい
雰囲気だけど、意志の強そうな瞳が印象的な大学二年生だ。

「でも、先生が男の人だとは思いませんでした」

「えっ、知らなかったんですか？」

私の眩きに、優希ちゃんが目を丸くして驚いた。

「うん。電話したらアシスタントさんが応対してくれたから、てっきり女性の方だと
思ってた」

「倉本さん、パンフレットに書いてあったわよ。先生の名前、平岡俊介って」

「えっ、うそ！ 私、カリキュラムばかり見てました」

橋本さんの指摘に、今度は私が驚く番だった。

「どうやら、料理教室に通うことばかり考えていて、目に入っていなかったらしい。」

「ふふっ……でも真奈美さん、いいなあ」

「え、何が？」

優希ちゃんの言葉に、私は首をかしげる。

何か羨ましがられることなんてあるかな。

「今井さんに向かいの調理台で！ しかも今日、ちょっと話してませんでした？」

「あ、はい。少しだけ」

「わあ、羨ましいです！ 今井さん、かつこ良くないですか？」

優希ちゃんが顔を赤らめながら言う。

その無邪気な可愛さが、私には眩しく映った。

「あー、そういう意味ですね。でも、今井さんってチャラそうじゃないですか？」

「チャラいってどうか、まあ女慣れはしてそうですね。それだけモテること
すよ」

「うーん、軽いのはちよつとね。それより、私は平岡先生派。大人の男性って感じ
だし」

そこへ橋本さんが割って入ってきた。

「大人の男性、か。平岡先生って、何歳くらいなんでしょうね？」

「私、聞いたわよ。三十五歳だって。ちなみに、今井さんは三十歳」

私の疑問にすぐ答える橋本さんを、優希ちゃんは尊敬の目を見た。

「橋本さん、情報早い！ 平岡先生も素敵ですよ。真奈美さんはどっち派ですか？」

「私は……どっちもピンとこない感じですよ。二人とも確かに素敵だとは思いますが」
特に答えを用意していなかった私は、曖昧に答える。しかし、言いながら一瞬、平岡先生の笑顔が脳裏にちらついた。

「えー、せつかく良い男が二人もいるのに、もったいないですよー」
「良い男、か。うん、そうですね」

それをキヤッチする態度すら衰えてしまっおとろているのかもしれない。本気で女子力上げなきゃなあ、と思った。

* * *

丁寧優しく指導してもらえし、生徒もみんな良い人そう。その上、かつこいい男性が二人もいるのだから、これは女子力アップに持ってこい。毎週楽しく料理教室に通えそう！

なんて出だし好調な私の希望を、激務が容赦なく打ち砕いた。

「倉本、次の特集はもうできてるのか？」

「ライターさんからの原稿待ち状態です」

翌週、月曜日の夕方。岩本課長から確認が入って、私は現状を伝えた。

「ちゃんと尻たたいておけよ。レギュラーの方は大丈夫だな？」

「そ、それも……同じライターさんなので……」

「おいおい、大丈夫なのか？」

「もう一度、連絡取ってみます！」

電話をしようとしているところに、後ろから肩をたたかれた。

「真奈美先輩、原稿チェックお願いします！」

「あ、はい」

美織から原稿を受け取ると、今度は先輩社員からも名前を呼ばれる。

「倉本、電話ー！ アイラデザインから」

「はい……っ、お電話代わりました、倉本です。いつもお世話になっております」

これは今日もなかなか帰れそうにない。今日は料理教室二回目のレッスン日なのに。平岡先生の姿や橋本さん、優希ちゃんとの会話を思い出す。

午後六時半を過ぎた頃、私は意を決して自分の席を立ち上がった。

「岩本課長、すみません。今日は……」

これで上がらせていただきます。明日、朝早く来ますから——そう言おうとする。

「おう、倉本。悪い。この原稿、今日中にチェック終わらせてくれ」

先に宣告されてしまった。

「……は、はい。わかりました」
これで料理教室、欠席確定。

私は廊下に出て欠席を伝える電話をかける。アシスタントの松林さんが応対してくれた。

その日は結局、午前零時を過ぎての帰宅となった。

「はあ、疲れた。眠い……」

玄関のカギを締めたのだけ確認すると、靴を脱いで部屋に入り、ベッドにつつ伏す。そのままぶたを閉じれば、夢の世界はすぐそこだったけど……

「だめ！ メイク落としてない！」

自分に言い聞かせるように叫び、ベッドから這い出る。

洗面所に向かうのは億劫で仕方ないけど、昨日掃除機をかけたばかりの部屋が自分を少し後押ししてくれる。最近、やっと整理整頓の習慣が身に付いて、部屋とオフィスの机回りを綺麗な状態に保てるようになったのだ。

メイクを落として洗顔した後は、しっかりと化粧水と乳液で保湿した。

シャワーは明日の朝に浴びよう。

寝る準備をしながら料理教室のことを思い返す。

立ち読みサンプル はここまで

二回目にしてもうレッスンを休んでしまったと、ぼんやりした頭で反省する。焦る気持ちと同時に、がっかりしている自分に気がついた。私は自分が思っている以上にレッスンを楽しみにしていたんだ……

ふらふらとした足取りでベッドまで戻り、パジャマに着替えてから消灯した。

暗闇の中で目を閉じると、平岡先生の微笑が浮かぶ。今夜会えたら仕事の疲れも少し癒されたかもしれない。

そんな風を感じている自分が意外で笑ってしまった。

「よし、女子力上げよう」

ぶつぶつ言いながらまぶたを閉じ、私はそのまま朝まで熟睡した。

* * *

翌週の月曜日、三回目の料理教室。

どうにか仕事を片付けて、開始時刻の午後七時ギリギリに教室へ滑り込んだ。他の生徒はすでにみんな来ている。

「こんばんは！ 先週はお休みしてしまい、すみませんでした」

「あ、倉本さん。いらっしやい。仕事お忙しそうですね」